

【4-8 定性的システマティックレビュー】

CQ	6a	手術可能な浸潤性乳癌に対して術前化学療法は推奨されるか？
P	手術可能な浸潤性乳癌で術後に化学療法を施行する必要があると考えられる症例	
I	術前に化学療法を行うこと	
C	術後に化学療法を行うこと	
臨床的文脈		化学療法を術前に行うこととは術後に行うことを比較する

O1	全生存期間の改善	
非直接性のまとめ	治療法は主にCMFやAC(EC)である preoperative vs postoperativeとpreoperative and postoperative'sandwich' vs postoperative の2種類が含まれている	
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない	
非一貫性その他のまとめ	異質性は乏しく非一貫性に問題はない	
コメント	10のRCTのいずれもOSに差は認めておらず、信頼区間の狭い結果で、OSに差がないことは強いエビデンスと考えられる	

O2	無再発生存期間の改善	
非直接性のまとめ	治療法は主にCMFやAC(EC)である preoperative vs postoperativeとpreoperative and postoperative'sandwich' vs postoperative の2種類が含まれている	
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない	
非一貫性その他のまとめ	異質性は乏しく非一貫性に問題はない	
コメント	10のRCTのいずれもDFSに差は認めておらず、信頼区間の狭い結果で、差がないことは強いエビデンスと考えられる	

O3	乳房温存率の向上	
非直接性のまとめ	治療法は主にCMFやAC(EC)である preoperative vs postoperativeとpreoperative and postoperative'sandwich' vs postoperative の2種類が含まれている	
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない	

非一貫性その他のまとめ	10のRCTのうち有意な差をみとめているものが6 差をみとめなかったものが4であり $I^2=83\%$ で異質性があると判断されている。特に2つの異質性の高いRCTを除くとRR 0.82(0.76-0.89, $P<10^{-5}$ $I^2=52.8\%$ と 異質性の低い状態でも有意な差を認めている。
コメント	異質性の調整を行っても有意な温存率の向上を認めている。

04	局所再発率の増加(温存手術)
非直接性のまとめ	治療法は主にCMFやAC(EC)である preoperative vs postoperativeとpreoperative and postoperative'sandwich' vs postoperative の2種類が含まれている
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない
非一貫性その他のまとめ	11のRCTを評価すると、局所再発率が有意に高いが異質性も高い。異質性のある3つのRCTを除外すると、HR 1.12 (95% CI, 0.92 to 1.37; P, 0.25) heterogeneity (I^2 , 0%; P, 0.86) となり 異質性のない状態であれば、局所再発率に有意な差を認めない
コメント	異質性のある状態では局所再発率が有意に高くなるとされているが、異質性のない状態では有意な差はなくなるため、エビデンスの強さは低いと考えられる

05	心毒性の発生頻度
非直接性のまとめ	治療法はFAC FEC CMFやACとさまざまである
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない
非一貫性その他のまとめ	異質性はないと判断されている
コメント	有意な差を認めていない

06	血液毒性の発生頻度
非直接性のまとめ	治療法はFEC とAT→CMFである
バイアスリスクのまとめ	重大なバイアスリスクは認めない
非一貫性その他のまとめ	異質性はないと判断されている
コメント	Cochrane reviewでは詳しく考察されていないが、Leucopenia, neutropenia, infectionsを合わせた評価で有意な差を認めた。